

2021年2月

今月の新着図書から

佐々木力『数学的真理の迷宮：懐疑主義との格闘』（北海道大学出版会，2020年）

高等科図書主任
林 知宏

今回は、私個人にとって様々な思い出が蘇える著作をとり上げる。著者佐々木力は、私の大学院時代の指導教官であり、博士論文の主査であった。何より私が純粋な数学研究に行き詰っていた時に、数学史研究、すなわち歴史的視点から数学を眺めることに蒙を啓いてくれた恩師である。佐々木教授の下、もう一度大学院で学び直そうと研究室を訪ねてから、はや30年以上の歳月が経つ。以来、私にとっては導き手であり続けたことは間違いない。しばらく会う機会もないままに過ごしていたが、今年になって知人からの情報を通じて、昨年暮れ（12月4日）に彼が急逝していたことを知った。まさに愕然とする思いであった。本作は結果として彼の遺著（2020年12月10日刊行）となってしまった。

この本の内容は、第Ⅱ部に所収された論考「エウクレイデース公理論数学と懐疑主義」を軸に展開されている。現代の数学にも踏襲されている数学的演繹体系（論証構造）、すなわち定義→公理・公準→証明というシステムは、古代ギリシア時代のエウクレイデース（ユークリッド）『原論』に由来する。古い時代で他に同様な文献が残されていないことから、その形成について人々の関心を引いたのだった。この『原論』のシステムについて、サボーという学者が、「ゼノンのパラドックス」で知られるゼノンに代表されるエレア派のソフィストに対抗するために組まれた体系であるという説を1960年代に提示した。以来、様々な議論が研究者内で交わされてきた。作者は、このサボーの説を批判することを旨とする。副題にあるように、古代の懐疑主義の批判的議論に応じるために、『原論』の論証方式は構築されていったと主張する。広く文献が狩猟され、それ自体は相応に説得力に富む。ただ、それがどれほど著者にオリジナリティがあるのかは疑問も残る。

本作は長く佐々木教授の著作（社会批判的なものは除く）を読んできた者からすると、代表作とは言えないと思う。より大きく影響を受けたという意味では、『科学革命の歴史構造』上、下（講談社学術文庫）、『近代学問理念の誕生』（岩波書店）、『二十世紀数学思想』（みすず書房）の方が代表作の名にふさわしい。ただ、この著作中で論じられる、パスカル、モンテーニュ、ライプニッツ、アリストテレス、ウィトゲンシュタインといった名前を見ると、私の読書傾向がいかにか彼の影響下にあるかをあらためて思い知らされる。

頻繁に会うことがなくなってからも、ときおりメールで対話する機会があった。ときに佐々木教授の著作中の記述に関して疑問や批判を投げかけたことがあった。たいていの場

合、私の言うことなどに耳を傾けてくれなかった。私にとって一つの厚い壁であったのは確かだ。その壁となる相手はもはやこの世にいない。まさしく無念の思いである。